

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島大学歯学部における国際化教育：授業への英語導入を基軸とした多様な取り組み
Author(s)	加藤, 功一; 谷本, 幸太郎
Citation	日本歯科医学教育学会雑誌, 40 (1) : 20 - 23
Issue Date	
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055301">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055301</a>
Right	この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。 This is not the published version. Please cite only the published version.
Relation	



# 広島大学歯学部における国際化教育—授業への英語導入を基軸とした多様な取り組み—

加藤 功一，谷本 幸太郎

広島大学歯学部

## 抄録

広島大学歯学部では，豊かな人間性を有し，国際的に活躍できる歯科医療人の育成を目的として，この10年余りの間，教育の国際化に力を注いできた．とりわけ日英両言語授業法を歯学専門プログラムにおけるすべての授業科目で採用した2012年は，国際関連事業の拡大にとって重要なターニングポイントとなった．それを契機に，海外協定校からの学生受け入れが常時可能になり，教育現場の国際化が大いに促進された．実際，海外からの留学生を短期・長期に受け入れる各種のプログラムを毎年実施した．この取り組みは，国際的教育環境の充実に役立つだけでなく，歯学教育を通じた国際貢献という点でも重要な意味をもつ．また，国際的環境の中で日本人学生らの海外留学に対する意欲が年々高まり，海外で多様な経験を積みたいと考える学生が増加して，実際，毎年多くの学生を協定校へ派遣できるようになり，学生らの視野を広げる機会の提供につながった．本稿では，このような教育国際化の経緯，現状，展望について紹介する．

**キーワード：**国際的教育環境，日英両言語授業法，国際歯学コース，短期受入プログラム，海外短期派遣プログラム

## 緒言

広島大学歯学部では、教育の国際化を推進するため、とりわけこの10年あまりの間、さまざまな取り組みに挑戦してきた。その結果、わが国における歯学部・歯科大学の中できわめてユニークな教育環境が整備され<sup>1)</sup>、その成果が実を結びつつある。本稿では、その経緯や現状について紹介するとともに、今後の展望について述べたい。

本学歯学部が創立40周年を迎えた2005年頃から、歯学教育を国際化すべきとの機運が高まった。国立大学の法人化と並行して、他大学との差別化を図り、独自のステータスを築こうと躍起になったのは本学に限らないだろう。その後、2009年頃から教育環境の国際化へと大きく舵を切り、2011年以降、数々の国際関連事業に邁進した<sup>2,3)</sup>。

歯学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠して実施される標準的な歯学専門教育に専心する一方、国際化への勢いは止まることがなかった。標準化と差別化という一見相反する目標を掲げながら、実のところ国際化は、両方の目的にとって重要な役割を果たした。令和4年度に改訂された歯学教育モデル・コア・カリキュラム<sup>4)</sup>においても、「国際的素養の獲得と国際医療への貢献」は主要な目標として掲げられていることから、必ずしも正反対の到達目標ではない。さらに言えば、国際化教育は、学生らにとって人間力を高める格好の機会であると思われる。教室の内外で国際的な環境に身を置き、普段はなかなか経験できない社会、文化、言語などに接することで、広い視野で物事を俯瞰し、将来に起るであろうさまざまな変化にうまく適応しながら合理的な判断ができる人材が育成されると確信する。このような教育の重要性は、令和4年度改訂歯学教育モデル・コア・カリキュラム<sup>4)</sup>でも強調されており、日本歯科医学教育学会でも重要課題として取り上げられている<sup>5,6)</sup>。

## 授業の英語化

2012 年度から広島大学歯学部における歯学プログラム専門教育課程（主に 2 年生前期から 5 年生前期までの 4.5 セメスター）のすべての講義，演習，実習において英語による教授法を採用した（2023 年度現在 118 科目）。もう少し正確に言えば，英語と日本語の両方を用いて授業を行うことを全科目に求めた。私たちはこの授業法を「日英両言語授業法」と称している。授業の進め方は担当教員の裁量に任せているが，いずれにせよ重要なことは，日本人学生及び外国人留学生（英語を話せることが前提）が同じ教室内で授業を受け，いずれの学生も同じレベルで理解できることを前提とする点である。そのうえで，各教員は担当する教科の特徴に応じてさまざまな工夫を凝らし，学生らの声を聴きながら，授業の改善に努めてきた。日英両言語授業法の採用から 11 年が経過し，英語を用いた歯学教育を恒常的に提供できるようになったのは，教職員および学生らの理解と多大な努力の賜物である。このように英語のみによって専門教育課程を完結できるのは，我が国の大学ではわずかのケースを除いてまれであり，われわれ独自の誇れる教育法であると自負している。開始から 5 年を経過した時点での評価結果が岡らの報告<sup>7)</sup>にまとめられている。

日英両言語授業法の採用は 2 つの大きな効果をもたらした。一つは，教育現場に国際的環境が整備されたことである。日本人学生らは，日常的に英語にどっぷりと浸かることになった。決して英語の上達が国際的であることを意味するものではないが，世界の共通言語である英語の運用能力を高めることは，人的ネットワークの拡大や異文化の理解に役立つ。また，世界を舞台に活躍する研究者になるための素地を与えるであろう。もう一つ，

さらに重要な効果は、英語での教育が常時行われていることによって、外国人留学生を随時受け入れることが可能になった点である。また、その人数も教室のキャパシティーが許す限り制限がなくなった。実際、以下に紹介するように、年間を通して多くの受入プログラムを企画することが可能になり、多数の外国人留学生を受け入れるようになった。

### 外国人留学生の受け入れ

日英両言語授業法の採用と同時に、文部科学省・特別経費「アジアと連携したグローバル化対応型高度歯科医療人教育システムの構築」プロジェクトの一環として、国際歯学コース（International Dental Course; IDC）を開設した。このコースでは、海外の協定校から毎年数名の歯学部生を招き入れ、約4年間にわたって歯学専門教育を実施する。国際歯学コースの学生らは、日英両言語授業が行われる歯学科に加わり、2年次～5年次における臨床実習開始直前までの期間、日本人学生らと切磋琢磨しながら勉学に励む。IDC生が広島大学で取得した単位は、それぞれの母校において単位互換され、卒業要件単位として扱われる。初年度にあたる2012年度には、アイルランガ大学歯学部から2名およびホーチミン市医科薬科大学歯学部から1名の学生を招いた。翌年から、カンボジアの健康科学大学歯学部が加わり、それぞれの大学から1名ずつの学生を受け入れることになった。国際交流協定に基づき学費を免除するとともに、生活費の一部として奨学金を支給した。

2018年度からは、私費留学生の受け入れも開始し、ホーチミン市にあるホンバン国際大学歯学部から毎年数名の学生がIDCに加わるようになった（これまでの6年間に私費留学生16名をIDCに受け入れた）。2015年度にはIDC第1期生が修了し、現在までに35名のIDC学生が巣立っていった。修了生は母校の病院でトレーニングを受け、その後、母国

の歯科医師免許を取得する。IDC 修了生はいずれも優秀な成績を修め、現在は歯科医師や大学教員として活躍している。

IDC 以外にも定期的あるいは不定期に留学生を受け入れるプログラムも容易に企画できるようになった。受入期間は数日間～1年間と多岐にわたる。日本学生支援機構(JASSO)や広島大学独自の奨学金制度等を活用しながら、多様な協定校から、多い時には年間 60 名を超える留学生を受け入れてきた(2018 年度には 14 大学から計 62 名)。この 10 年あまりの間に受け入れた留学生は 400 名近くに上る。受入期間中の教育内容は期間に応じてさまざまな工夫を凝らした。短期の場合には、授業への出席や病院見学に加え、広島平和記念資料館の見学や世界遺産である宮島・厳島神社の参拝、日本人学生との交流会などの文化研修にも十分な時間を割いた。1 セメスター以上滞在する場合には、受入学生の希望に応じて 2 年生～4 年生のいずれかのクラスに混ざり、日本人学生と一緒に通常の授業を受ける。学期末には通常通り到達度評価が行われ、広島大学の単位を取得し、それらの単位のほとんどは母校の単位に互換される。このような 6 カ月コースに、ベトナム、インドネシア、カンボジアなど東南アジア諸国から毎年数名の留学生を受け入れてきた。

以上のように、数日間～4 年間とさまざまな受入期間に柔軟に対応できるのは、ひとえに授業への英語の導入のおかげである。それらのコースは、とりわけ東南アジア諸国の歯学部生に人気が高く、多いときには一度に 20 名以上の学生を受け入れることもあった。このようにして本学歯学部の教育環境が一段と国際化していった。

## 日本人学生の海外派遣

日本人学生らは、教室内の国際的環境のなかで日々多様性に触れるようになった。しかしながら、そのような経験を積む最も効果的な方法は、海外に出向くことであろう。2020年～2022年度のコロナ禍には困難であったが、さまざまな規制が大きく緩和された2023年春から学生の海外短期派遣を再開した。表1に示すように、2023年春（2月～5月）及び夏（8月～9月）の間に、8つのプログラムを企画し、合計27名の学生を1週間～35日間、海外に派遣した。特に春の派遣学生は全員が4年生から5年生へ進級する時期の学生であった。広島大学歯学部では、2019年度のカリキュラムの大幅な改訂により、5年生の第1ターム（4月上旬～6月上旬）をギャップタームとし、学生らが自主的な計画に基づいて自由に活動できるようにした。そのおかげで、11名の学生らは学年末を跨いで比較的長期間にわたり海外留学を経験できるようになった。米国、フランス、台湾、インドネシアのいずれの派遣先においても、大学病院での見学実習を主な研修内容とし、それに加えて講義や基礎実習への参加、研究交流、現地の学生らとの交流、エクスカージョンなどさまざまな活動を展開した。短期間の海外研修では、歯科医学に関する知識や技能を習得することが中心的な目的ではない。むしろ多様な社会や価値観に直接触れることが第1の目的であると認識する。これらの派遣プログラムを通して学生の意識は大きく変容することを目の当たりにしてきた。

以上の派遣プログラムの企画には、本学歯学部の国際担当教員と国際室が協力し、派遣先の担当教員と綿密な事前相談を行い、また、派遣学生らの要望を聞くなどしながら創り上げてきた。派遣先大学やその所在地によって事情が大きく異なることから、学生らの効果的で安全な海外研修にはさまざまな配慮が必要であるが、2023年春夏の企画とその実

施を通して、多くのノウハウを蓄積した。これらの派遣プログラムは、協定校との絆の上に成り立っている。現在、広島大学では世界の 60 校近い大学歯学・歯科病院と国際交流協定を結んでいるが、今後、学生らの選択肢をさらに増やすためにも、協定の拡大が不可欠である。さらに今後は、海外派遣プログラムの到達目標を明確に提示して、歯学教育カリキュラムの中にきちんと位置づけることも必要であろう。

### 結言

教育現場の国際化は、国際社会で活躍できる人材を養成するために重要である。しかしそれ以上に、教養教育的意義、すなわち若い学生らの価値観を拓き、人間性を豊かにするための方策としてきわめて効果的であると本学歯学部で育った学生たちを見ていると強く感じる。このような教育効果を狙うには、学生らへの動機づけを継続的に行っていく必要がある。特に、入学と卒業で学生が常に入れ替わるという教育機関の性質上、啓蒙の連続性は不可欠である。国際化に大きく舵を切った 2012 年度以降、大学受験を控えた高校生らも本学の教育に対する姿勢を知るところとなり、国際化に期待する新入生の割合が年々上昇していると感じるのは好ましい傾向である。

本学における国際化の根幹をなす日英両言語授業法に関して、より質の高い授業を実施できるよう教員が一丸となって改善の努力をしていくことも大切である。そのためには、英語による教授法について実践的な研修が効果的であろう。また、日英両言語授業法を継続的に検証・改善していくため、本学歯学部内に歯学教育センターを組織した。海外の協定校におけるカリキュラムも年々変化するため、受け入れ側のカリキュラムを調整して、それらにうまく対応していくことも交流の継続にとって重要である。たとえば、母校での



臨床実習の開始時期に合わせて本学での修了時期を調整したり，母校で新たに必須となった学習内容を本学でも教授する工夫を行ったりするなど，細かな配慮が必要である。

最後に，教員・事務員・学生・留学生・協定校のすべてが有機的に連携しながら，国際関連企画を発展させ，その結果，学生らの人間力が育まれると同時に教育現場が魅力的なものとなるという相乗効果は，ともすると画一的になりがちな歯学教育現場にあってきわめてユニークな効果をもたらしている。

本稿に関して開示すべき COI 状態はない。

## 文献

- 1) 富士谷盛興，森尾郁子，關 奈央子，保坂啓一，吉川一志，峯 篤史，友田篤臣，川口陽子．歯学領域における国際的人材育成に関する調査．日歯連合誌 2023; 2: 36-43.
- 2) 西村英紀，片岡竜太，柏崎晴彦，森田浩光，加藤功一，連携教育の今．日歯教誌 2019; 35: 79-84.
- 3) Kato K, Sugai M. Improvement and enhancement of BioDental education and research in Hiroshima. Proc. 6th Hiroshima Conference on Education and Science in Dentistry, Hiroshima: Hiroshima University Faculty of Dentistry; 2015. 85-8.
- 4) モデル・コア・カリキュラム改訂に関する連絡調整委員会．歯学教育モデル・コア・カリキュラム 令和 4 年度改訂版．文部科学省．
- 5) 俣木志朗，森尾郁子，魚島勝美．日本歯科医教育学会の国際化について．日歯教誌 2016; 32: 131-2.

- 6) 森尾郁子. 歯科医学教育のグローバル化. JICD 2019; 50: 49-51.
- 7) 岡 広子, 二川浩樹, 谷本幸太郎, 加藤功一, 広島大学歯学部における日英両言語教育システムの評価－5年間の学生の授業内容理解と認識変化－. 日歯教誌 2018; 34: 49-54.

## 著者への連絡先

加藤 功一

〒734-8553 広島県広島市南区 1-2-3 広島大学歯学部

電話 : 082-257-5645

Fax : 082-257-5649

E-mail : [kokato@hiroshima-u.ac.jp](mailto:kokato@hiroshima-u.ac.jp)

International Education at Hiroshima University School of Dentistry:

Bilingual Education Enabled Diverse Initiatives

KATO Koichi and TANIMOTO Kotaro

School of Dentistry, Hiroshima University

Especially in the past ten years, Hiroshima University School of Dentistry has been deeply involved in the internationalization of dental education, aiming at nurturing dental professionals who have a rich sense of humanity and can play an active role in the global community. In particular, 2012, when we adopted the English-Japanese bilingual teaching method in all lectures and practices given in our dentistry program, was an important turning point for the expansion of our international activities. Thanks to this, it has become possible for us to accept undergraduate dental students from overseas partner schools at any time, which has greatly promoted the internationalization of an educational environment at our school. In fact, every year we have provided in-bound student exchange programs, both short and long term, which has also enabled us to make international contributions in dental education. Furthermore, the international environment at our school has increased the motivation of Japanese students to study abroad and gain diverse experiences. We are currently able to send many undergraduate students to partner schools around the world every year, providing opportunities for them to broaden their horizons. This paper introduces

the history, current status, and prospects of our endeavors for the internationalization of dental education.

**Key words:** international educational environment, English-Japanese bilingual teaching method, International Dental Course (IDC), short-term inbound program, short-term outbound program

表1 2023年春期・夏期海外短期派遣プログラムの実施状況

派遣期間	受入機関	派遣者所属・学年	派遣人数
2～3月(3週間)	アイルランガ大学 (インドネシア)	歯学科・4年生	2
3月(2週間)	台北医学大学 (台湾)	歯学科・4年生	3
3～4月(35日間)	ワシントン大学 (アメリカ合衆国)	歯学科・5年生	3
4月(2週間)	ストラスブール大学 (フランス)	歯学科・5年生	3 (IDC 1名)
8月(1週間)	チュラロンコーン大学 (タイ)	歯学科・ 3, 4年生	5
9月(2週間)	ストラスブール大学 (フランス)	歯学科・6年生	2
9月(2週間)	ホーチミン市医科薬科 大学 (ベトナム)	口腔健康科学科・ 2, 3年生	4
9月(1週間)	台北医学大学 (台湾)	口腔健康科学科・ 3, 4年生	5